

古戦場に建つ我家

小倉 一純

バブル景気の始まった一九八六年、両親とともに都内からこの多摩丘陵の一角へと引越してきた。二十八歳だった。

そこは、新しく造成されたひなだん雛壇である。見晴らしのよい高台にあり、我家は標高八十メートルほどの場所に建っている。西方を望むと、南北に連なる丹沢山系と背後の富士山がよく見えた。

裏手は、小高い山になっていて、頂上は家の二階からさらに四、五メートルほど高い。二階自室の、北側の腰高窓を開けると、杉林に覆われた山の斜面が、すぐ目の前にある。

引越後早々、生活に必要な設備を手配した。僕の部屋にもエアコンが取り付けられたが、それはすぐに故障してしまった。メーカーに修理を依頼すると一旦は直るが、しばらくするとまた故障してしまう。その繰り返しだった。

エアコンが故障した途端に体調が悪くなってきた。些細ささいな事が気になり出し、不安を感じようになった。まるで得体の知れない何ものかに憑つかれたような感覚に陥り、それは偶然とは思えない符合だった。

エアコンの効かない部屋で眠っていると、息苦しさが日々、募っていった。両手で首を締めつけられるような感覚に襲われ、何度も目が覚めてしまう。最初は恐怖でしかなかったが、次第に奇妙な闘争心が芽生えてきた。「締められるものならもっと締めてみる！」

心で念じ、抵抗せず身を任せた。それは降参ではなく、得体の知れないものを受け入れるための準備だった。だが、あまりにも苦しく、それ以上、目に見えない相手を挑発するのはやめにした。

同居の両親だが、僕のそんな異変とはまったく無縁のようであった。

引っ越して間もない我家は何かと忙しかった。当地での金融機関の口座開設や、完成間

もない我家の手直しのため、住宅メーカーの営業さんや職人もたびたび顔を出す。庭を含む外構もまだ完成していなかった。

僕自身、会社での人間関係など個人的な問題も山積みで、心の休まる間もなかった。ストレスもどんどん溜まっていき、精神的にも追い詰められていた。

毎朝、家の近くを歩いてみることにした。すると数日後、丘陵の尾根にあたる細い峠道に、「小沢原おざわがはらの戦い・古戦場跡」と書かれた立って看板を発見した。タイムスリップしたかのような感覚に陥った。五百年ほど前の同じ場所ので激しい戦いが繰り広げられていたのである。

帰宅後調べてみると、一五三〇年、小田原を拠点に関東かんれいへの勢力拡大を目指す北条氏と、かつて関東管領おうぎがやつを務めた上杉氏の流れをくむ名門・扇谷上杉氏との戦いが、我家のすぐ近くで行われていた。

両陣営の決戦を翌日に控えた夜、北条氏の

軍勢は、我家の建つ小高い丘陵地に陣を構え、対する上杉氏の軍勢は、現在の小田急線・新百合ヶ丘駅しんゆりがおかのある一帯の低地に布陣していた。

兵力では上杉勢が圧倒的に有利だったが、北条勢は丘陵地という地の利も活かした奇襲作戦で相手を翻弄ほんろうし、勝利を収めた。

近くの郷土資料館の記録にも、「小沢原の戦い」の戦場いくさばとして、現在の我家の住所が明記されている。つまり、我家は、古戦場の上に建っていたのである。

この勝利が、北条氏の関東での勢力拡大を決定づけた。武者たちが勝利の雄叫びならを上げた坂道は、その故事に倣いなら、「勝坂」と呼ばれるようになった。現在、我家からもほど近いその坂道には、「マンション勝坂」と命名された集合住宅が建っている。

北条氏は、一五九〇年に豊臣秀吉により滅ぼされるまで、およそ九十五年間、小田原を拠点に関東を支配した戦国大名である。当時

の小田原は、関東における最大規模の都市であった。

話題を現代に戻す。一九九五年にはWindows95が発売され、それを機にパソコンを購入したものの、これもよく故障した。

どうやら、僕の部屋にある電気製品の電子基板に問題が起こりやすいようだった。エアコンの場合には、心臓部であるコントローラ部分の電子基板に不具合が頻発していた。

こうした現象は月日とともに少しずつ解消していった。例えば、エアコンは何度も修理をした結果、ようやく正常に動くようになった。同時に、体調も徐々に回復していった。何か目に見えない力から解放されていくかのように、僕の部屋の空気も変化していった。そうなるまでには、十五年の歳月が流れていた。

さらに二十年以上が過ぎ、その間、我家では数年前に父が帰幽し、現在は高齢の母と二人で暮らしている。迎えた八月十五日は、お

盆であり七十九回目の終戦記念日だ。

僕は、「小沢原の戦い」にも思いを馳せながら、現在と過去とが交錯するこの我家で、平和の尊さを噛み締め、心安らかな思いに浸っている。

窓の外に目をやると、夏の日差しの中、住宅の屋根がどこまでも広がり、かつての古戦場を偲ばせるものは何もない。